

海保青陵の立山資源開発提言に見える本草学との関わり —津田随分齋を中心に、本草家を介した情報交流の視点から—

吉野 俊哉

はじめに

江戸後期に活躍した異色の経世家海保青陵（宝暦5年〈1755〉～文化14年〈1817〉以下、青陵）は、商品経済が発展した社会の現状をふまえ、富国策による藩財政の立て直しを各地で具体的に説いていった。

その施策を「流通の改革」と「産品の増産、品質向上、新産物の開発」とに分けて見たならば、後者には技術革新とともに、物産学とも呼ばれた天産物についての実学的な本草知識の広がりも影響していたと思われる。享保以降の全国的な産物調査の実施や各地で進められていた藩による産物政策でも、それが重視されていくからである。

青陵の経世論には、弟に家督を譲って各地を遊学しての見聞や幅広い交遊から得た情報のあったことが指摘されており⁽¹⁾、その中には具体的な産物情報も散見される。それらを見ると、本草学に造詣の深い医家などと交遊があり、そこから得た情報が反映していたのではないかと思われるが、これまでそれらが本草家との関わりの視点から論じられることはほとんどなかった。

筆者はこれまで近世後期に隆盛した本草学の諸相を調査する中で、それらの知識が様々な場面で社会生活に影響していたと感じてきたことから、青陵もまた幅広い交遊の中で具体的な本草学の情報に接し、それを産物開発の具体的な提言に反映させていたのではないかと考えるようになった。

青陵は、金沢に滞在した文化2年（1805）夏から3年（1806）8月までの一年あまりの間、加賀藩で産物政策の中心にあった村井長世などの重臣や領内各地の商人、十村らと交流を持ちながら、藩の財政政策について自由な立場で情報を交換していた。そして、金沢を去る直前（文化3年7月1日～4日）には立山へも訪れており、山中での様々な見聞を書き残している。

その後、同年9月に京都に居を定めて以降は遊学せず著作に専念している。金沢滞在中の見聞に基づく『綱目駁談』、『陰陽談』もその時に書かれており、同書の中では加賀藩の産物政策に問題点を指摘し、藩の財政を豊かにするための経済政策を詳述している。例えば藩札発行、大坂商人からの資本導入の他、藩財政再建に資する領内の鉱物資源や薬草等の開発、薬種・塩硝・織物等の産物を改良・増産し、藩の保護で藩外に売り捌き増収を計るなど積極的な富国政策の提案である。

この二つの著作いずれにも、立山山中での見聞を細かく引用しながら山中に埋蔵する地下資源開発の可能性を指摘した部分が見られるが、これは立山での資源開発の可能性に言及した最も早い時期の指摘だったとされるものである⁽²⁾。その内容は科学的に正確とは言えない部分があるとは言え、具体的な鉱物資源の名前を挙げその価値を述べる部分には、天産物を実生活の豊かさに結びつけるために理解しようとした近世本草家と同様の視点を感じられる。青陵自身が本草学に傾倒していたとは思われないが、立山山中の鉱物に関する記述を見ると、本草家や医家との交遊を通して鉱物資源の種類やその活用について初歩的な情報知識を得ていた可能性が強く感じられる。

当館では、青陵が京都へ移った直後の文化3年9月に、その2ヶ月前の立山登山での見聞を実弟へ書き送った直筆の書簡（以下、『書簡』）を所蔵している。その内容には立山登山の見聞を伝えるだけでなく、後に『綱目駁談』、『陰陽談』に引用した立山山中の資源開発との記述とのつながりを考える上でも重要な内容を含んでいると思われた。

そこで小論では『書簡』の内容を手掛かりに、立山山中での見聞に見える本草学的な視点の存在とその背景

に垣間見える本草家との交遊、そして同時代の本草家たちの情報ネットワークとの関わりを指摘したいと思う。

次章以下、まず『書簡』と『綱目駁談』、『陰陽談』に引用された立山での見聞を対照しながら、青陵の立山登山の実態を紹介する。そして青陵が立山山中に埋蔵すると指摘し開発の必要性を提言した具体的な地下資源の記述と本草学の情報や知識に着目して、『綱目駁談』の中で、名前を挙げてその知識と人物を称賛する本草家津田随分齋の存在を中心に、当時の金沢や上方の医家、本草家との交遊を通して、青陵が著作の中に援用した本草学関連情報を入手していた可能性について考察したい。

1. 当館が所蔵する『書簡』について

『書簡』は、当館開館直前の平成2年（1990）に建設準備室が古書店から購入したものである。その経緯と『書簡』の梗概等については高瀬保氏の論考に詳しい⁽³⁾。

縦15.8cm、横218.8cmの巻紙（本紙部分）に書かれたもので、一廻り大きな乳白色の厚口和紙で裏打ちし軸を芯にして巻かれた簡易な卷子の体裁になっているが、見返しや発装、巻紐はない。

青陵は、書簡を出す際には手許に写しを残し、宛先、発信の日付、さらに相手からの返書の日付なども追記して保管していたようで、この『書簡』はそのような写しとして作られたものと考えられている⁽⁴⁾。

『書簡』の端裏書には、

九月十一日封／同月廿五日着／十月朔日状封ス／禎文賢弟 鶴／萬福

とある。

宛先の「禎文賢弟」は、安永5年（1776）22歳の時に家督を譲って家を継がせた3歳年下の実弟角田彪（以下、彪）を指す⁽⁵⁾。「鶴」は青陵の号「阜鶴」の略で、書簡や著作の中で自称として用いている。

青陵は、儒学者角田青溪の長男として江戸で生まれ幼年より宇佐美瀧水に儒学を学んだ。後に儒者として学問で身を立てるべく自由な生き方を求め、彪に家を継がせ自身は曾祖父の姓である海保に復姓した。以降江戸や京都で学塾を開き、各地を遊学する自由な生き方を実践していった。その一方で、彪のことは自分とは対称的で真面目な性格として一目置いていたようで、『書簡』では敢えて「賢弟」としているのではないかと思われる。『稽古談』では彪を評して「鶴舎弟一人アリ、鶴トチガヒテ甚敬謹之性質也（中略）舎弟ハ敬謹家ニテ、且、幼少ヨリアマリ他所ヘモ出ズ、多クハ両親ノ側ニ給仕セリ、鶴ハ幼少ヨリ他処ヘ出デ、友達多シ」としている点にも同様の意識が窺える。

彪は尾張藩に仕え当時は江戸藩邸にいたので、『書簡』の本通は江戸へ届けられていたことになる。端裏書には「九月十一日封」と書かれているが、本文の末尾には「重陽後一日封」とあるので、発信は書き上げた翌日だったと見られる。そして、青陵が9月11日に発信したこの書簡に対して彪は10月1日付で返書を寄せ、それには青陵からの書簡は9月25日に届いていた旨が書かれていたものと推定される。青陵は写しを作った際に先ず備忘のため発信日を記録しておき、その後に彪からの返書を受け取って日付を書き足して保存した⁽⁶⁾ようで、『書簡』を熟覧した際、筆者には「九月十一日封」の部分とその後の部分は墨の濃さが違うように見えた。

『書簡』の記述⁽⁷⁾に拠れば、青陵は立山を訪れた翌月（8月）11日には金沢を発ち、途中越前府中で20日を過ごしその間に講書を行っている。そして9月1日に越前を出発した後大津に2日間留まり、9月7日には京都に到着した。そこで、きちんとした居所を決めるまでは木屋町の銭屋平兵衛の許で仮住まいしている。『書簡』の発信は9月11日なので、これは青陵が京都へ着いて間もなく、取り急ぎ到着の報告と近況を知らせるために出されたものであった⁽⁸⁾。また仮住まいした際には竹中文卿と近江屋彦右衛門の世話があったので、彪には、ついでが有れば彼らに（彪から）礼状を出して欲しい旨を記している⁽⁹⁾ところを見ると、彪もこの両者とは旧知だったと見られる。

青陵の著作には、交遊する人士から意見を求められたことへの返書とした、特定の相手の立場や個々の問

題点に合わせた持論を「談」として書き残したものが多く見られる。その内容はプライベートな部分にも触れていることから、そのような著作は刊行を意図していなかったものと考えられている⁽¹⁰⁾。それらも『書簡』同様に漢字と片仮名を用い、見聞を事例にした平易な文章で相手に語るような文体で書かれている。この「談」という青陵の著作の体裁は、まさに特定する相手に語り聞かせる助言を速記したようでもあり、『書簡』と大変よく似ている。この類似を見ると「談」として書き残された著作には、この『書簡』のように手許に控えて残された内容を下敷きに、加筆修正して著されたような事情が推察される。

2. 『書簡』と『綱目駁談』、『陰陽談』に記された立山山中の具体的な見聞

『書簡』、『綱目駁談』、『陰陽談』それぞれに記された立山山中の記述を比較してみると、いずれでも地獄谷については独自の視点が披瀝されているが、そこに文学的な潤色などは見られない。書かれた時期は『書簡』が最も早いので、それ以降に書かれた2つの著作は『書簡』の内容を下敷きにしつつ簡略にしているものと思っていたが、むしろ後年に書かれたものの方が詳しい部分もある。『書簡』とは別に道中日記のような里程など細部に亘る記録が別に存在したのかもしれない。

『綱目駁談』は、「加賀藩で交遊した大夫」に宛てて藩の産物政策への進言として書かれ、公表を意図しない私的な内容を含む。青陵の著作を研究してこられた長山直治氏はこの「大夫」を、この時期に加賀藩で産物政策を推進した産物方主付村井長世と指摘している。また『陰陽談』は文化10年(1813)に執筆され、「加賀藩領内の村に住む藩政に深く関わる商人」に宛て藩の富国策を論じたもので、青陵の研究者蔵並省自氏はこの「商人」を越中戸出村の武田尚勝(竹村屋茂兵衛)と推定している⁽¹¹⁾。武田は文化8年(1811)に京都で青陵が講義した『洪範』の筆録を、後に『洪範談』として刊行するなど深い交流が窺える人物でもある。

『綱目駁談』、『陰陽談』はいずれもテーマを加賀藩の現状分析と財政立て直しとしており、その両方に立山での見聞が事例として引用されている。中心となるのは地獄谷で見た鉱物資源だが、それ以外にも山中での見聞が詳しく書かれていることから、当時の登山記としても史料価値があるとともに、青陵の立山への印象や山中で関心が高かった場所を知ることができる。

以下、まず登山道に沿った立山山中の記述を比較し、最も印象が強く、また資源についての本題となる地獄谷での見聞を整理する。

2-1 頂上までの立山登山道

山中での見聞を記した部分は、『書簡』では「○鶴今年ハ七月四日ニ越中ノ立山ニ登リ申候」と書き出した長文の描写が続く。具体的な地名を挙げ、おおよその里程も細かく書かれている。

仲語の案内で禅定道に沿って山頂へ登り、その後地獄谷を巡る一般的な旅程の描写はこの時代に書かれた紀行文と比べて大きな違いはない。ただ、山中の景色に対する個人的な感想などはほとんどなく、見たままの登山報告の要素が強いようである。

① 藤橋

藤蔓ニテ谷川へ橋ヲ掛ケタルモノ也 (『書簡』)

文中に感想は書かれていないが、ここで転倒して難儀したことを詠んだ漢詩⁽¹²⁾が添えられている。

② 「桑谷ノ休憩所」

桑溪トイフ処ニ辻堂ノ様ナルモノアリ 辻堂ハアロフハズナシ 唯亭ノ様ナルモノ也 (『書簡』)

当時は、桑谷には休憩のために茶屋があった。

③ 「称名滝」

山中ニ瀑アリ 長サ三十六丁トイフ 十丁斗ハキツトアリ 幅五十間トイフ 二十間アマリアルベシ 一里コナタヨリ近ヅク事ナラズ 一里半外ヨリ望ム事也 勝妙瀑トイフ (『書簡』)

立山ノ藤橋ノ下ノ流れハ、下ハ常願寺川也、上ハ勝妙ガ瀑トイフ瀑也（中略）コノ瀑ハ立山ノ路草生坂トイフ坂ヨリマツスグニ見ユル也、瀑ノタキツボヨリ草生ノ山ノ根マデ一里半、草生ハ藤橋ヨリ三里ノボリタル処也、土人云瀑ニ一里近キ所ヨリサキヘハユカレズ、瀑ノ響ト霧トニテ進ムコトナラズト云ヘリ、其辺ニハサゾ々々金玉宝物タクサンアルコトナルベシ（『綱目駁談』）

禅定道途中の名所「伏拝」から称名滝を遠望していたようである。但し、滝の感想は景色の感慨ではなく、その付近にあると考えた鉱物資源のことであった。藤橋からは、黄金坂、草生坂、材木坂など説話がある場所を通して登る道である。称名滝の高さには関心を持ったようだが、青陵の実証主義的な性格からすれば間近から滝を確かめたかったということであろう。

④「弥陀ヶ原、立山温泉」

コノ辺ニハ木ナゾ一向ナシ、唯五葉ノ松ガ地ヲホフテオルギリ也、弥陀原野トイフ平坡三里アリ、コノ奇ナル草木アリ、木モ四五尺也、雪ニテノビラレヌト見ユル也、雷鳥トイフ鳥アリテ鳴ク也、コノ鳥ナニヲ食トシテ山上ニナルヤラトントシレヌモノ也（『綱目駁談』）

立山高サ室堂マテ九里八丁也。上ルコト四里半バカリヲ桑谷ト云フ。桑谷ヨリ上ヘハ弥陀原野也。此弥陀原ヨリワカル道アリテ、温泉アリ（『陰陽談』）

「五葉ノ松」はハイマツ。「奇ナル草木アリ、木モ四五尺也、雪ニテノビラレヌト見ユル也」などには植生への関心も見られる。「雷鳥」を見て、「何を食べているのか」という疑問は生活感のあるユニークな感想である。この部分は博物的な視点から本草家の採薬登山の見聞に似たものを感じさせるが、産物を見る眼は、植物や薬草ではなく鉱物や岩石などに向いていたようである。

⑤「一ノ谷鎖場」

一ノ谷トイフ鎖ヲ攀（『書簡』）

藤橋ヨリ七里ホドノボリテ一ノ谷ト云フトコロアリ大キナル川也、大石ノ背ヲ踏テ石ヲ攀テノボル鎖場トイフ、鎖ニツルサガリテ上ルコト也、此川ナドモ水ニ落合フカ（『綱目駁談』）

登りは難所一ノ谷を越え、鎖場を登ったことが書かれている。

⑥「室堂」

郷廩ノ如キモノニツアリ（『書簡』）

室堂小屋を倉のようとした形容は他見しない。

九里八町上レバ室堂トイフ処ニ至ル（『綱目駁談』）

⑦「頂上」

室堂ヨリ五十丁ミチ一里半 又鎖ニテ登ルヲ絶頂トス 卉木モナシ 石ノ碎末斗也（『書簡』）

頂上では快晴だったようで、ご来光を拝している⁽¹³⁾。

室堂ヨリ一里半ノボリテ絶頂也、御前トイフ也（『綱目駁談』）

⑧「劔岳」

御前トナラビテ御前ヨリモ少シ高キ山、御前ノ北ニアリ、劔ト云尖頭削立シテ数シレズ、筍ヲタクサンツミタルヨフナ山也（『綱目駁談』）

（註一劔岳を指して）ロクシヨフニテ塗りタルヨフナ山也、コノ山ナドニハ決シテ金、銀、玉、宝沢山アルニチガヒナシ、凡ソ立山ヨリ東ハ信州ザカイ也、昔シ佐々氏立山ゴヘヲシテ信州ノ松本ニ出タリト土人語レリ、然レバ人ノ通フベキ路アルニチガヒナシ（『綱目駁談』）

山中を案内する仲語の話の聴きながら道中の名所を経て頂上へ登ったことがわかる。200年以上前の佐々成政のザラ峠越えの話も途中で聞いていたことがわかるが、他の部分では信州側からの材木盗伐の横行とその改善が不十分な加賀藩の姿勢に触れている⁽¹⁴⁾ので、ザラ峠越えの話からは盗伐に来るルートの問題視したことを示している。その他に仲語から聞いていたであろう道中の景観にまつわる立山信仰に付随した説話には興味を持たなかったようで、それについての感想は述べられていない。

2-2 地獄谷の記録

『書簡』の記述を見る限り、具体的に青陵が興味を示し記載していたのは地獄谷である。立山では、経世家青陵は、未知の場所から尋常ではない場の雰囲気を感じ、関心のあった「礬石」、「礬石」、「雄黄」、「雌黄」といった鉱物が埋蔵する気配に注目したということであろう。立山山中には、これまで存在が知られておらず、新たに産物となるものがあるに違いないという確信のもとに、それを実証的に見聞したいという本草家が採薬に期待したような意識があったようである。

この時代、禅定に限らず様々な立場の者が立山へ登っていたが、そのような人々が書き残した紀行文や日記は登山目的やそれぞれに興味を持った事柄を中心に書いており、その視点は一様ではない。例えば、京都の本草家山本章夫が嘉永4年（1851）に採薬を目的に登山した際の日記⁽¹⁵⁾は、立山山中で目にした植物の記録が中心である。

それに対して青陵は、埋蔵する未知の資源を利用することで財政立て直しに役立つという意識で山を見、自分の経験や知識を以て産物政策に当たる役人たちを説得するための根拠としたかのように見える。青陵にとっては、本草学もそのために必要な知識の一つだったようで、地獄谷を観察しそこに具体的な鉱物名を挙げているのは、運良く立山で資源となる鉱物を目にして雀躍するのではなく、それまでに持っていた天産物の知識と場の持つ力から、そこに豊富な資源が埋蔵している可能性を感じ取ったということであろう。

⑨「地獄谷」

室堂ノ北ニ地獄谷トイフモノアリ 礬石礬石雄雌硫黄杯甚多シ 地中ヨリ吹き出ス事花火ノ通也 ヲソロシキ事言フ斗ナシ（『書簡』）

地獄ヲハ二時バカリ見物セリ、地獄ノ小シ南ニ池アリ、水ノ色藍ノ如シ、サイノカワラト云フ也、凡ソコノ辺ハ明礬、礬石、硫黄アレバ、甚ノ宝物産スルコトナルベシ（『綱目駁談』）

室堂ノ北ニ地獄トイフ処アリ、明礬硫黄燃出シテ昼夜烟ノノボルコト二三十ヶ所アリ、アレハツイヘナルモノ也、皆モヘテナクナリテシマフ也（『綱目駁談』）

燃へ出ス穴大ナルハ径リ二間モアルベシト思ハル、ソノ穴一パイニ烟ノボル、其響遠雷ノ如シ、中々チカヅカレス、近ヅカバサゾ々オソロシカルベシ、地獄ノ中ニ血ノ池トイフモノアリ、マツカナル水也、朱ナルベシ、貨殖伝ニ山上ニ朱アレバ其下ニ金アリト云ヘリ、決シテ金気ナルベシ、凡ソ地獄ノ吹出ス烟ノ色種々也、土人名ヲツケテ紺屋ノ地獄、烟草屋ノ地獄、団子屋ノ地獄ナド々云、其色ニテ其下ニアルモノヲ知ルベシ（『綱目駁談』）

立山ノ室堂ノウシロニ、地獄トイフ所アリ。余、登山セシ時ニ、半日バカリ地獄ヲ見タルコトアリ。地ヨリ硫黄・焰硝ノフキ出ス所也（『陰陽談』）

青陵は仲語から地獄巡りの案内を聞き、半日近くかけて地獄谷周辺を隈無く観察して回っていたことがわかる。金沢を離れて約一ヶ月後に京都から彪に書き送った『書簡』に記した立山登山見聞の感想には、

加候ハ古風ニテ古法ニ念着シテ 世ノ流行ヲ知ラヌ国風ユヘ 禁シテ礬硫（註一明礬、硫黄）ヲ取ラズ 飛州信州ヨリ盗ムヨシ也 大方本藩ノ木曾ノ民杯来ル事ナルベシ

とある。有用な資源があることの驚きやその開発の可能性ではなく、加候（加賀藩主）の産物への関心の低さ、農本政策に固執する藩上層部の頭の固さを揶揄する内容のようにも見える。しかもそれに続けて、一年あまり滞在した北陸の地に対する感想には、

北国ノ上京候得ハ 別而京都ハ美敷 天気杯迄日々美日也 鶴北国ニ二年居 北地之様子見候ニ 土地ハ富タレトモ夷狄ナリ

とある。これらを、身内である彪にのみ伝えた本音であったと考えるならば、青陵自身は加賀藩政の旧態依然とした雰囲気になじめなかったこと、北陸の風土にも好感を持っていなかった恨み節とも思われる部分である。

3. 立山の鉱物資源の開発提言とその背景

地獄谷を一見して、鉱物資源について前述のような指摘をしていることから見ても、これが物見遊山の登山に終始したものでなかったことは確かであろう。しかし、何の知識もなく初めて山中で見た地形から資源の存在や鉱物の種類、用途などを直感することはできないだろうから、この指摘の背景には基本的な本草学、特に鉱物の知識と、事象は「理」で合理的に説明し理解できるとした青陵の独自の視点があったと見てよいだろう。前者の知識については、奇石類の玩弄ではなく鉱物の特徴や形状、有用性などを、それまでの本草家との交遊の中から少なからず得ていたものと思われる。

そして青陵は基本的に、資源の埋蔵が有望な土地であればそれを開発し、産物として売り捌き収益の増加を目指すことを企図していたと考えられる。そのために必要な知識は本草学に長けた者から得、技術や資本は江戸や大坂の山師や商人から導入するといった筋書きを持っていたと思われる。それまで各地で見聞した事柄や築いた人脈は、このようなところにも役立てられたのであろう。

ここで、青陵が立山での資源開発に注目した根拠は2つあったと思われる。1つは、青陵の思想の基底にある実証的な視点から、「理」に基づいて資源の存在を信じていたこと。もう1つは加賀に来る前から各地で見聞した類似例や医家、本草家らとの交遊から得た基本的な本草学的知識、天産物の存在やその利用価値には少なからぬ関心があったであろうということである。但しここで考慮しておきたいのは、青陵が加賀藩の招聘で来藩した訳ではなかったことである。これは、藩に対して比較的自由に現行のやり方を批判的に提言する立場では好都合だったと思われる。しかしその一方で、加賀藩がそれまで独自に持っていた立山の硫黄などにかかわる情報や、奥山廻りによる信州側との国境管理の実態に関しては青陵には十分に伝わっておらず、それらは提言に反映されていないようである。青陵は、藩が御締山にして立山山域での自由な開発と販売を禁じていた点に批判的な目を向けていたためか、藩の方でも100年以上前に立山の硫黄生産に注目していたこと⁽¹⁶⁾には言及していない。

3-1 青陵の「理」に基づく視点

立山地獄谷で特徴的な臭気を伴って噴出する硫黄はともかく、礬石（砒素を含む有毒鉱物）、礬石、塩硝、明礬が沢山あるはずというのは、青陵の「理」に基づいた見方である。青陵の「理」とは、『陰陽談』でも「凡ソ理ハ天地間ノスジユヘニ、コノ理ニテミチビキ、理ニテトケバトケヌコトナキコト也」と述べる、「必然性」の意で、事象を客観的、論理的に把握した事実に基づき、そこから当然の帰結として結論づけられる結果を導く原理とも言えよう。

青陵は、その教養の中にあつた儒学的な「理」や桂川甫周らを通して触れた蘭学由来の科学的、合理的視点の影響を受けた思想を形成したが、その独自の視点⁽¹⁷⁾を元に自然界を「理」で捉え、立山の天産物を見たときにもそれを当てはめ、地形や地勢を根拠に、そこに資源があるのが道理であると自信を持って断言する。青陵の「理」は、現象の因果関係を重視すると言う意味では科学的と言えるのかも知れないが、逆の意味でこれは青陵が本草学者ではなかったことの証左とも言えるだろう。だから青陵にとっての本草学とは、あくまで産物政策を論じる必要から自然界に存在する資源の種類、産物となる価値を見出す手段の一つという位置づけだったと思われる。

しかし前述の『綱目駁談』にあつたような、地獄谷で「血の池」が酸化鉄のために真っ赤なのを見て「マツカナル水也、朱ナルベシ」と、それが朱（硫化第二水銀）の埋蔵を示すと断定したり、「理」に照らしてその場所に金があるのは当然とする根拠に、実態を離れた「貨殖伝ニ山上ニ朱アレバ其下ニ金アリト云ヘリ⁽¹⁸⁾」とする古代中国の道家思想を当てはめたりするのは、観念的な理解であつたとしか思われぬ。

同様に、天地の「理」に拠る立山山中は、

此地脈ニハ、焰硝・明礬沢山ニアル理也。凡ソ天ヨリ降ルモノハ六角ナリ。（中略）地下ニアリテ、ホ

リ出シタルモノハ皆四角也。明礬・焰硝凡ソ硝トイフ類ハ皆四角也。立山ハ此四角ナルモノ、多フ出ル山ト見ユル也。硝ノ類ノ多フ出ル也。地獄ノ烟ノ立騰ルコト、大ヒナル地獄ハ烟ノ上ルコト五六丈モ上ルベシ（『陰陽談』）

甚大ヒナルハ、立山ノ御前トイフトコロヨリ、ヨフ見ユル也。勢甚猛ナルモノ也。フキ出ス煙ナルコヘ也。烟ノ色イロ々アリ。黄ナルモアリ、青ナルモアリ、白キモアリ、黒キモアリ。余思フニ、コレハ吹出ス物ニヨリテ、色チガフコトナルベシ。何ノ色ハ何ノ物也トイフコトハ、イマダセンギセネドモ、烟ノ色ニイロ々アルハ、物カツイロ々アルニチガヒナシ。明礬ハ何色ニ烟アガルモノ也、焰硝ハ何色、硫黄ハ何色トイフカチアルモノナルベシ（『陰陽談』）

是モ大坂ノ道修町ナドニテキ々アワセタラバ、決テワカルベキ也。イヅレニモ立山ハ産物ノ多キ山ナルベシ。木モハヘズ、草モハヘヌコヘニ、是明礬、硫黄ノ類ナクテハ叶ハヌ也。是天地ノ理也。何モ生ゼヌトコロトイフハナキコト也。草木ノ生ゼヌトコロハ、草木ホドノ財貨ヲバ、是非生ゼネバナラヌ理也。木ハ五葉ノ末ヨリ外ニハナシ。鳥ハ雷鳥ナラデハオラズ。獸ナドハタヘテオラヌコト也。是水晶カ、玉ノ類カハ是非ナフテ叶ハヌ理也（『陰陽談』）

などの記述に見られるものであった。

とは言え、これらを非科学的な荒唐無稽のことと読み解くことは、ここでは意味がないだろう。青陵の意図は、見たままの事象の因果関係を重視することで、それまでは注目されて来なかった資源を開発することの重要性に目を向けさせることだったと思われるからである。その上で「是モ大坂ノ道修町ナドニテキ々アワセタラバ、決テワカルベキ也」と言うのは、加賀へ来る前から大坂の道修町界限で石薬や鉱物の知識に近い薬種商たちとも親しく交流し、人脈を持っていたことが前提にあったと考えてよいだろう。

当時、幅広い天産物を民生厚用に役立てる知識の集積は本草学の範疇である。青陵はそれを、後述する津田随分齋ら本草家との交遊に与った部分が大きかったと考える。しかし、青陵の関心が本草学に傾注していった形跡は見られない。

青陵が立山では地獄谷に興味を持ち、そこから望む山々も資源が眠ると捉えていた点は非常に興味深く、仮にその開発が成功していたなら加賀藩の財政にもいくらか影響を与えた可能性はあろう。とは言え、青陵自身には実務的な鉱物資源開発の経験は無く、この点は本草家として知られた平賀源内が中津川や秋田藩で鉱山開発を提言、かつ指導していたのとは違う。青陵自身が直接技術的な指導を行うのは現実的ではなく、ここでは自らが理論を説くことで、藩の産物政策で資源の活用が財政の改善につなげられることの動機付け、或いはその可能性・方向性を示したものと見るべきであろう。青陵の説いた立山での産物開発とは、財政改善のための経済政策の可能性、或いは動機として挙げているものであって、本格的な資源の開発に伴う採算や技術を含むものではないということである。

つまり青陵の提言は、「鉱山開発の助言」ではなく、今後それまで目が付けられていなかった新たな資源の存在に着目しそれを富に変えることの重要性を立山来訪で見聞した埋蔵資源を事例として示したことに意味があったと考える。

3-2 立山を訪れる以前からの見聞や経験に基づく視点

青陵の前述の提言の背景には、以前からの幅広い交流で得た知識や人脈があった。それまで開発の手が入っていない立山山域で新たな産物を開発し、他藩へ輸出することで増収を計って藩財政を改革するという構想には、具体的な輸送や販売ルートの開発し品質の向上といった現実的な問題が関わってくるが、青陵はそれまでの知識や経験からそれらの問題をどう見ていたのか、著書の記述から辿ることにする。

3-2-1 江戸・大坂での人脈、情報

本格的な開発を行うためには、資金や技術が必要なことは青陵も十分に分かっていたはずである。そこで一連の提言で注目されるのは、青陵の著作に現れる「山師」という今ではやや胡散臭い響きも感じる語である。これも資金力、知識や技術、或いは販売網を持った者を指した「藩外の資本と技術」の意のメタファーだとすれば、藩政に関与する中枢にあった藩士や商人たちに対して、新たな産物を開発するにはそれを呼び込む魅力をアピールする必要性を伝えたかったのではないかと考える。

つまり、大坂資本や道修町の薬種問屋との人脈から販売力、資本を導入し、大坂などで関係を持った本草学者などからは技術を提供してもらえば、立山の資源開発と加賀藩の財政改革は可能なのではないかと説いた訳である。そして青陵がそのためにまず必要と考えたのは、旧態依然とした藩の体制に改革の動機付けを行うことであり、藩士や藩政への関係者に助言することで藩に重い腰を上げさせるためであったように思われる。

以下のような記述には、それが感じ取れる。

江戸ニテハチラリト其サタアレバ、ヂキニ山師ツキテ、願ヒテ遠方ニテモユキテ吟味スル時ニ、忽チ銀主ツクコト也、一体空ナルヨフナモノナレドモ、銀主モ山心ノアル男デナケレバツカズ、少々ノ費用ハ上カラ下サレテモ、鉛銀ナドノ出ル所ヘハ、往フトイフ人ヲツカワサレテ御見セナサルコトヨロシ
 (『綱目駁談』)

立山ノ明礬ヲ大ソフナルコトニ思召サレバ、扱不巧者ノ人ヲヤルベカラズ、大キニ損ヲスルコト也、薬種屋ノシクジリモノナドニブラツキ男アラバソノ人ヲ山代アタリヘヤリテ、山代ノ百姓ノ小利口ナル男ヲ選ミテ先山代ニイテ、ヨク々々明礬ノアル処ヲキ々正シテ、往テ見テ先カヘルコト也、扱明礬ヲホルコト掘リツケタル人ニホラスコト也、鶴下坂シテ大坂ニテキ々正シテ、明礬ホリヲ御国ヘ下スベシ、カマヘテ素人ニ掘ラセヌコト也、餅ハ餅屋也、(中略)如シ山代ノ明礬ヲ試玉ハ仰セコサルベシ、鶴宜シキヨフニトリハカロフベシ、ソノ時ニ黄連ノヨフナルモノモ談ズベキコト也 (『綱目駁談』)

御国(註一越中国加賀藩領)ノ鉛ハ天下ノ絶品也、大カタ立山辺ヨリ出ルコトナルベシ、立山ニハ鉄モ銀モ産スルトイフ人アリ、唯今マデステオカレタルユヘニ知レヌコトナルベシ (『綱目駁談』)

これらは実際に特定の人物を指しているものではないが、かつて青陵は江戸ではそのような山師、大坂では道修町の薬種屋とも話を通じ、いざとなれば役に立ちそうな「薬種屋ノシクジリモノ」たちとの人脈は広がったと思われる。

またこれとは別に薬種が関連する事例では、加賀藩領内で生産する黄連は品質が高く、流通量の増加もあり「加賀黄連」として一定のブランド価値で取引されていたことを引き合いにしている部分がある。

薬種屋に関連する『稽古談』の記述には、

扱黄連ハ加賀ノ白山ノ麓ニ産スルモノヲ上品トス。即、加賀黄連ト云也。加賀ニテハ一向ニウツカリトシテ、黄連ハコノ方ヨリ外ニハナキトバカリ思テオルニ、唯、直段日々ニサガリテ、ラチモナキヤスウリヲ、セネバナラヌヨフニナレリ。ソレヲモ知ラズニオリシ也、鶴、京・大坂ノ薬種屋ニ、コノワケヲキクニ、薬種屋云ハク、昔ヨリシ加賀黄連ト云テ、加賀デナケレバナラヌヨフニイタルニ、近年、丹波ヨリ黄連ヲビタダシフ出テ、今ハ丹波ノ黄連ヲ、加賀黄連トシテウリカイヲスルコト也

とある。青陵は日常の商業活動、市場の動向にも目を向け、情報を得ていたようである。

この事例は『陰陽談』でも触れており、

加賀黄連ト云テ、黄連ハ加州ノ名産也。ユヘニ加人ハウツカリトシテ、黄連ハ此方ノ名産ジヤ、京大坂ノ薬種屋ニテモ、加賀黄連トバカリイフテ、外ノ国ノ沙汰ハナキ也ト、カタク覚ヘテオルコト也。然ルニ今ノ加賀黄連ハ、半分ヨリ多ク丹波ヨリ出ヅル也。丹波ニテハ山ニツキテ黄連ヲ作ル也。丹波デ作りタル黄連ヲ、加賀黄連ニシテウル也。ソロモノコトハ土地ニ理屈ハナキ也。シロモノ品ヲ賞スルコト也。丹波ニテ作りタルガ、加賀ホドノ品ニユケバ、是丹波ノ黄連ヲ、加賀黄連トイフテモ、ズイブンヨキコト也。今ニ加州ノ黄連、一向ニ直段サガルニチガヒナシ。コレヲウツカリト知ラズニオレバ、大

キニ国中へ入ル金ノ高ノ知レヌコトナル也。

とあるのは、商品経済の発展した近世後期にあって薬種屋の持つ市場影響力を踏まえ、歓迎される「特産品」や「名産品」のブランド力が重要なことを指摘していると思われる。但しここでの記述はそのブランド価値に便乗する、丹波からのいわゆる「産地偽装」の台頭に「ウツカリ」として手を拱いている加賀藩の稚拙さを指摘している点が注目される。

それと同様に立山産の鉱物資源についても、広く藩外に売り捌かれ特産として知れ渡ることの必要性、つまりブランドとしての価値を意識することも含んでいたように思われる。

もちろんそこに至るまでには、品質の確保や増産により市場での流通量が増えることを必要とするが、そこに上方の商人の力を借りる必要があると考えるのは、ここにもそれまでに青陵が築いた人脈が前提にあったと見る。

そしてこの大坂の商人たちとの関係を論ずる上では、大坂での木村兼葎堂との交遊の実態を知る必要もあると考える。文人、豪商、本草家であった兼葎堂は大坂における人的ネットワークの中心であり、事実青陵は兼葎堂を頻繁に訪ねているからである。

そこで、『兼葎堂日記』の記載をもとにした年譜⁽¹⁹⁾を見ると、青陵はかなり頻繁に兼葎堂を訪ねていたことが分かる。

- ・寛政元年（1789）3月16日、4月18日
- ・寛政3年（1791）8月18日、10月29日※但しこの日兼葎堂は留守
- ・寛政8年（1796）1月19日、4月27日、（10月3日※青陵の紹介で和久田豹吉が兼葎堂を訪ねる）
- ・寛政12年（1800）6月24日※但しこの日兼葎堂は留守

しかも大坂へ訪ねるだけでなく、寛政3年に兼葎堂が一時伊勢に住まいを移した際にも、わざわざ足を運んで訪問するような親密な関係があった⁽²⁰⁾ようである。また、寛政8年10月3日には青陵が兼葎堂に紹介した知人が訪れている。こうした事実の背景には、青陵自身も当初は然るべき人物から紹介を受けて兼葎堂を訪ねていたに違いなく、その後兼葎堂とは密接な関係ができていたことを窺わせる。特に、兼葎堂が小野蘭山（以下、蘭山）の門人であったことと、蘭山の門人たちとも個別に横のつながりを持っていたことは重要である。後述する津田随分齋もまた個別に兼葎堂を訪ねているが⁽²¹⁾、ここでは兼葎堂をキーマンとして蘭山を中心にした京都や大坂の本草学ネットワークともつながりが垣間見え、青陵は兼葎堂や津田随分齋らとの交遊を通じて、そこに集まってきた情報を得る機会があったのではないかとと思われる。近世本草学では、比較的身分に拘泥せず同好の士や師弟関係などのサロンが形成され、そこでの人や情報、実物（標本）の交流が知識の広がりや深化に重要な役割を果たしていたからである。

しかし、それを裏付けるような青陵と兼葎堂との具体的な交流の存在を示す史料は、現時点では管見できていない。この詳細は今後の研究の進捗に期待し、小論では研究の方向性を提起するにとどめたい。

3-2-2 加賀藩領内で立山以外の地域の情報

加賀滞在中、立山だけではなく領内各地で産物に関する情報を得ていた跡も見える。もちろん全てが開発に結びつけられるものではないが、開発へ目を向かわせる動機につながる要素は感じられる。

凡ソ五ヶ村ノ辺飛驒ザカヒハ、本草家二見セタルホドナラバ、サゾ>>宝玉ヲ得ルコトナルベシ、金府ノ東硫黄山ニハ瑪瑙ヲ生ズ、御留メ山ノ由、御留メナサルハ宝ノヘルヲイトフトイフ御心ナルベケレドモ、モヘルモノニアラズ、又ハ生スル也、立山ノ明礬ノヨフニヤケテシマフモオシキコト也、宝物ノ身ニナリテ見テモ、何年ニモ一タビモ人ニ賞翫セラレズニ朽チハツルコト、面白フアルマジキカ、瑪瑙ノアル山ニハ鉄ヲ生ジル理也、硫黄山ナドハ決シテ宝多カルベシ（『綱目駁談』）

「金府ノ東硫黄山」とあるのは「（いおうざんか）医王山（ようぜん）」を指したものと思われる。医王山の麓、才川七村、大西村付近は瑪瑙や玉髓、碧玉の産出で有名であり、加賀黄連は多くが医王山で産出したものであった。青陵は砺波郡

戸出村、高岡でも商人や十村との交流があり、越中西部の情報はそのような所からも耳に入っていた可能性がある。

また越中東部については、

(略) 愛本ノ水上ハ甚奇ナルコトダラケニテ、水晶ナド多キ所ナルベシト思ハル、水晶ノアルトコロニハ青礫石出ルモノ也、大キニ貴キ薬品也、鶴甲斐ニ逗留セシ時ニ石森トイフ所ヘユキテ、青礫ト水晶トヲ拾フタルコトアリ、一タイ甲斐ハ山ハ高ケレドモ山浅キヨフニ見ユル也、甲斐ノコトユヘニ浅キトイフニモアラネドモ見ユル也、甲府ヲグルリトカコヒテ高山アリ、山ノイタダキハ多クハ水晶也、地藏ヶ嶽トイウフ巔ニハ、水晶ノ長サニ丈バカリ、太サモ四間マワリホドノ水晶アル山、今ハ其ノ水晶ニ堂ヲタテ、堂ノ本尊ハ水晶也ト云ヘリ、一体甲斐ハ山ノ山ノトントノ中也、四面皆山ニテ南一方小シ開キテ、遙カ南ニ身延山アリ (『綱目駁談』)

とあり、現在の黒部市宇奈月町愛本新の情報を含んでいる。朝日から入善舟見方面では石榴石、切子砂と呼ばれたガーネットや六方石(水晶)などの存在が近世の本草書でも知られていることである。

青陵は、立山から下山の後にわざわざ沼保村(現朝日町沼保)の十村伊東彦四郎を訪ねて逗留している。『綱目駁談』には、

越中愛本ノ北ニ水ノカヲラヌ田地アリテ、民歎クコト久シ、沼ノ保ノ十村彦四郎ノ工夫ニテ、愛本ノ水上ヨリ水ヲツケテ、山ノ腹ヲ水ノ通ルヨフニシテ、水ヲカケテ今ハ沃田トナレリ、実ニ相公様ノ時ニテ、伊東彦四郎方ニ逗留セシ時ニ、愛本ノ水源ノ話ヲキケリ、伊東ハソレヨリ立山ヘワキ道ヨリノボリタルコト語レリ

とある。伊東が藩に開鑿を願い出た愛本新用水(享和2年<1802>完成)についても話を聞いており、新川の天産物に関する情報はこのようなところからも入手していたことがわかる。

また、下新川で産する水晶などを指摘する背景には、加賀来訪以前にも甲斐を訪れた際の見聞、水晶や青礫石⁽²²⁾を目にしてそれを拾うことがあったというような石薬に関する知識も持ち合わせていたことが分かる。これも青陵の背景にある情報量の広さが垣間見える一例であろう。

それとは別に、山中や山代の温泉を訪れたことを元にした事例も見られる。

白ラ山ノ凡ソ東方ノ山ノ中ヘ入テ見タルホドナラネバ、決シテ珍宝ヲ見出スベキモノヲト常々悔ユルコト也、鶴又山中山代ニ入湯セリ、山中ノ湯ハ硫黄也、山代ノ湯ハ明礬也、スレバ山中ノ東ニハキツト硫黄ノ出ル山ナフテ叶ハヌ也 (『綱目駁談』)

温泉に硫黄成分が含まれることは珍しくないが、これを硫黄や明礬の開発に結びつけるところに青陵の産物観が見える。

この他にも、立山では現地ですぐに接した人々に対するユニークな見方が見られる。旧知ではなくとも行った先々で現地の情報をつかんでいたようで、現地のことは現地の者から聞き出して確認する実証的な意識や、人を通じての情報収集が多い青陵の特徴が現れている。

以下の引用部分は、道中岩峯寺や芦峯寺で出会った者、山中での仲語などからの話を元に持論を述べている内容だが、現代の目からは鄙地を見下した差別的な意識が見えなくもない。

在方ノ御史ト先方トハコノヨフナル時ニ、甚ダ巧ヲ立ル勝手宜シキ也、芦峯岩峯辺村度支コレヲ聞出シ、村御史同道ニテセコヲツレテサガサスベシ、如シサガシテコザラヌトイフテ、外ノ人ユキテサガシダセバ、右ノ村御史、村度支ノ御奉公ヲ身ニシマズ、ソレヨリモ有ルモノヲカクシテナイト云フ咎ニオチルワケノモノナリ、カヨフニ示シタルホドナラバキツトサガシ出スベシ (『綱目駁談』)

如シ又蘆倉、岩峯ノ辺ノ人ニ出会ノ時アラバ、問フテ見玉フベキ也。如シ玉ノ類カ、硝ノ類ズイブンアリテ、土地ノ人内々取りテ、ウリ出スナド、フヨウナルコトナラバ、是表向キニシテウラセテヤルガ、上ニモ下ニモヨキコト也。(中略) 凡ソ山ニ産物多キ所ハ、古ヘヨリイハツタヘテ山ノ神、山ノ内ノ物ヲトルヲキラヒテ、大キニアレルナド、イハツタフルコト、多クアルモノ也 (『陰陽談』)

4. 青陵の提言の背景に見える本草家、加賀藩産物方関係者との情報交流

ここでは、青陵が交遊した医家や本草家を具体的に挙げ、彼らから得たと思われる本草学の基本的な知識が青陵の産物や資源の見方に影響した事例を取り上げる。特に京都や金沢で接触があったと考えられる津田随分齋の存在を中心に、上方と金沢を舞台に広がっていった本草家の情報ネットワークとの接点について考えてみたい。

4-1 津田随分齋

津田随分齋はこれまであまり知られていなかった人物だが、青陵との交遊関係だけではなく、上方を中心とした医家や文人たちの情報ネットワークと金沢とのつながりの点からも注目される。この関係を具体的に示すことで、青陵の知的背景の幅の広がりも見えらると思われる。

津田随分齋は、寛保2年（1742）に金沢に生まれた医家、本草家、俳人であった。名を養（以下、養または随分齋・養）と言ひ、随分齋、豹阿弥、菜窠、菜窩道人、青野など多数の号も用いている。隠居後に俳人となり豹阿弥、青野と号するようになるが、それ以前には随分齋と書かれたものを最もよく目にする。諸文献に見える名は養の他に、養徳、養徳夫。諱は善または合。字は合同、合大。通称は太一、太一郎、道乙などと記されるものである。更に上方で遊学中には「洞貝武十郎」の変名も用いていたようである。金沢で放蕩の末明和5年（1768）に上方へ行き、後に大坂で医家を開業したという⁽²³⁾。天明3年（1783）には、母親の病気を機に15年の上方遊学を経て42歳で金沢に帰っている。その後、経緯は不詳だが加賀八家の1つ藩年寄横山家に家中医として仕え、文化10年に金沢で没している⁽²⁴⁾。若い頃は放蕩し、後に弄石家、医家、俳人と幅広く活躍した文化人、自由人の姿が見えるが、一方で多方面の才能を持て余した奇人として知られた⁽²⁵⁾ようである。この他に小論で注目した本草学については、特に弄石を通して木内石亭との関わりがあったことについては後述する。

また、養の嗣子には津田煥（以下、煥または随分齋・煥）がいる。名は煥。字は君若、右内または宇内。号は随分齋。生没年は未詳である。正確な時期は不明だが京都へ遊学し、寛政4年（1792）に金沢出身の典薬大允荻野元凱（元文2年〈1737〉～文化3年）に入門。前後して蘭山にも入門して本草学を修め、寛政9年（1797）9月には白川山から比叡山に向かう蘭山の採薬行に同行している。この採薬の同行者には加賀出身の者が多くいた⁽²⁶⁾。また、同門で京都山本読書室二代となる本草家山本亡羊とも親しかった⁽²⁷⁾。ここからは、当時上方で活躍した本草家とのかなり広い交流を持ったことが見える。

養は寛政12年に60歳で隠居し、煥はその家督を継ぎ養と同じく藩年寄横山家に家中医として仕えるが、のち藩医となったという⁽²⁸⁾。そして養の隠居後には煥もまた父と同じく「随分齋」と号しているの、「随分齋」は親子二代を指していることになる⁽²⁹⁾。但し寛政12年以前からも煥が随分齋を名乗っていたことを示す史料もある⁽³⁰⁾ので、養の隠居が必ずしも明確な襲名の区切りではないようである。ただこのことが問題となるのは、親子とも上方に遊学して医家となり、そこでの交際範囲も類似し、しかも金沢に帰り横山家の家中医となっているなど酷似した経歴のため、史料に見える「随分齋」が実際は養、煥のいずれを指したものなのか区別が付きにくい部分のあることである。そのためこれまでも混同されたまま記載の資料があり、注意が必要である。随分齋・煥はその後安政2年（1855）には金沢で種痘所の設立に関わり⁽³¹⁾、医学史上に再度現れてくる。このような明らかに年代の違いから分かる場合はともかく、それぞれの活動時期が重複している場合には推定に拠らざるを得ない場合もあった。以下小論では、可能な限り養と煥を区別するが、両者に当てはまる、または判断がつかない場合は単に「随分齋」の名称を用いていく。

4-2 津田随分齋・養、煥と青陵の接触

青陵は、随分齋と接したことで石類に関する基礎情報、特に加賀や越中に産出する鉱石類に関する情報を

得ていたのではないかと思われる。そしてそこで立山に産する鉱物類の知識を得ていたとすれば、それが青陵にとって鉱物の開発に興味を覚えた契機となった可能性も考えられる。

青陵と随分齋の関係を示す直接の手掛かりは『綱目駁談』にある、

(註一立山山中の鉱物については) 本草ニ巧者ナル津田随分齋ナドヲツカハサシテ見セラルベシ、シカモ津田ハ草ヨリモ金石玉ノルイ巧者也トテ、京師ニテハ蘭山トイヘドモヤハリ津田ニ相談セシホドノ本草家也、扱葉草モサゾアルベシ、皆津田随分齋モノナリ、津田ハ業ニ巧者ナルノミナラズ、大勇気ナル人也、京師ニテ腑分ヲシタルトキニ、死人ヲ自ラ解キテ指ト頭トヲ風呂敷ニツゝミテ持チカヘリテ、宿ニテ解キタル人也、サレバ山中ナドヲイトフ人ニアラズ、一体本草家ハ年中採葉ニ出ルユヘニ、山ヲアルクコト甚巧者也、谷ヘオリ水ヲワタルコトナドナントモ思ハズ、山中ヲ独リアルクコトヲ楽ミニスルヨフナルモノ也、礬石、礬石、金、銀、鉛、銅ノアルトコロハ決シテ津田巧者ナルベシ

の記述である。

ここから、青陵が見た随分齋像を整理すると、概ね以下の5点にまとめられる。

- ①本草学に秀でている。
- ②特に草木よりも鉱物に関する知識が秀でており、その知識は（本草学の大家である）蘭山を凌ぐほどである。
- ③京都で屍解剖があった時、自ら解剖を行った後、屍の頭部と指を自宅へ持ち帰り詳細な解剖を行った豪胆さを持つ。
- ④山野での採葉の経験が豊富である。
- ⑤山に入って礬石、礬石、金、銀、鉛、銅等の鉱物資源を探索するのに秀でているはずだ。

青陵は随分齋の本草家としての実力を相当に高く評価していたことが分かる。但しこれが養、煥のいずれを指しているかはっきり分からない部分は残るので、以下その区別に留意しながら関連する医家・本草家を挙げ、併せて青陵との関連を整理する。

随分齋・養が上方でどのように、また誰に入門して医学や本草学を修得したのか明確な記録はないが、断片的に各所で現れる随分齋の名前を拾っていくと、改めてその活動範囲の広さが浮かび上がる。

①②⑤についての具体例として、まず随分齋・養は上方では弄石を通して木内石亭と交流し情報交換していたことが挙げられる。木内石亭が弄石を集大成した『雲根志』の三編卷之三（寛政3年〈1791〉刊）では、「変化類」に分類する「冬瓜化石」の説明に「冬瓜の化石は賀州金沢津田氏の珍藏にあり。同州河北郡伝燈寺の石澗中に得たり(略)」とあり、その図も載せている。それ以前にも、金沢へ帰ってからの天明7年(1787)に随分齋・養が石亭に能登産の「天狗爪石」を贈った記録⁽³²⁾や、その10年後の寛政9年10月7日に近江石山寺畔の秋月館で開かれた石亭ゆかりの「奇石会」にも収集品を出品している⁽³³⁾。

しかも、随分齋・養は自ら全国の鉱物、奇石などを産地別に分類した目録『石丈野史』三卷⁽³⁴⁾を著しているが、これは本草学、特に弄石に関しては膨大な情報を持っていたことの証左である。恐らくは自身も蒐集に執心していたものと思われるが、木内石亭との密接な関係を持ち弄石社の人脈を利用しなければ、このように広い地域からの情報は集められなかったに違いないだろう。『石丈野史』に序文や跋文はなく作成の意図や経緯は不明だが、上巻表紙に「津田養徳夫撰、男煥君若撰」とあることから、この執筆には煥も関わっていたことが明らかになる。ここから煥もまたこの分野には豊富な知識を持っていたことが窺える。

因みに同書で越中産に分類された石品のうち、特に立山を中心に産出としているものには、

- ・自然銅 立山
- ・石炭 立山
- ・硫黄数品 立山地獄谷
- ・自然瑪瑙硯 立山唱名か滝の流れ有 願寺川
- ・材木の化石
- ・立山材木坂
- ・雲母 立山一の越

が挙げられており『雲根志』の記載と重複したものも少なくない⁽³⁵⁾。

②は言外に養が何らかの形で本草学を蘭山から学んでいた、或いは親しく情報交換する立場にあったことを窺わせるが、養自身が蘭山に入門した記録は見当たらない。④から見えるのは、青陵は本草家の活動実態

をよく知っていたことである。ここに蘭山の名前が出ていることから、青陵は当時の本草学の実態を蘭山本人或いはその門人との接触から認知していたと考えられる。

本草学の研究では古典文献を博搜して関連する情報を抄出していく「文献学」の面もあるが、蘭山を中心とした学統は青陵が「本草家八年中採葉ニ出ルユヘニ、山ヲアルクコト甚巧者」と評しているように、山野での採葉、実物を自分の目で観察して記載する博物的な実習を重視していた。青陵の記述からは、随分齋がフィールドワークを行い自分で山野を巡って本草学を修得していた姿が見える。

煥は蘭山に入門していたことがはっきりしているので、『綱目駁談』に「京師ニテハ蘭山トイヘドモヤハリ津田ニ相談セシホノド本草家也」とあるのは、その知識水準を知る上で注目される内容である。しかしこれだけからはこの「津田」が養、煥のいずれを指したのか明確ではない。

この時代の本草学での石類の知識には、石薬から鉱物類に関する博物的な側面と、弄石と称される奇石や神代石（考古遺物）を攻究する流れがあり、その中心となるのは前者では蘭山、後者では石亭とされる⁽³⁶⁾。『綱目駁談』に見える「津田」が養を指すものだったなら、石亭とのつながりが深く弄石に詳しい点で、蘭山が一目置くほどの知識を持っていたのは間違いないだろう。しかしまた、これが養ではなく蘭山の門人である煥だった可能性も考えられる。煥自身も後年に江戸で開かれた薬品会では石品を出品している⁽³⁷⁾ことや、養と『石丈野史』を共著するほどの知識を持っていた事実から、師である蘭山が素直にその力を認める高弟であったことも否定できない。青陵はこの点を区別して書いていないが、いずれにしても青陵が随分齋との接触によって本草学の実態を理解し、鉱物類に関する知識を得ていた可能性は高かったと見られる。本草学の中でも、自分の目で実物を確かめること重視した学統の蘭山と、合理的実証的な青陵の思想には似た部分も感じられ、青陵が随分齋を称揚したのは理解できるところである。

また③に関しては、随分齋が京都で行われた解剖に参加し、自身が解剖に習熟していたことに触れた資料がある⁽³⁸⁾。但しこれも養、煥いずれを指したのかは断定しにくい。

漢蘭折衷の医家が主流になっていた当時の京都で、山脇東洋が宝暦4年（1754）に官許を得た人体解剖を行ったことはよく知られている。その後金沢出身の官医荻野元凱に学んだ河口信任が明和7年（1770）に京都の西郊で師の元凱とともに刑屍を解剖し、その所見をまとめた『解屍編』を明和9年（1772）に刊行した。この時に養が参加した明確な記録は見えないのだが、もし③の記述にあるのが養であったならば、それはこの時に行われた解剖だった可能性が高い⁽³⁹⁾。この仮説に基づけば、養は京都遊学中に元凱と接し医学を通して親交があった可能性もある。もしそうならば、後に煥が元凱に入門していたこととも無関係ではないかもしれない。

一方、煥は寛政4年に荻野元凱へ入門したことは分かっているが、上方で遊学した時期は明確ではない。ただ、ずっと後の安政2年に前述の種痘所設立に関わっていたことから考えると年齢的には明和7年の解剖に立ち会っていた可能性は低いと思われる。

そこでこれらをふまえて、青陵と随分齋の活動を時系列に整理する。養は天明3年（1783）には金沢へ帰っていたのに対して青陵は天明9年に初めて上洛し、途中大坂や越後へも行くことはあったが寛政13年（1801）までは京都に留まっていた。ここから考えると、上方で養と青陵が直接接触するタイミングは無かったが、煥とは上方で接触する機会があった可能性は高かったと思われる。煥自身は蘭山の門に学び、しかも養と同様に石品に詳しくはたはずなので、もし二人に接触の機会があったとすれば、青陵は煥から鉱物類を含む本草学に関連する話や『綱目駁談』にある養が行った可能性のある解剖の話も、京都で聞いていた可能性が高いだろう。そうでなければ、青陵は金沢に来た文化2～3年の頃、つまり養が隠居後（煥が随分齋を名乗り横山家の家中医となって以降）金沢で煥と再会したか、或いはそこで初めて養と直接会って聞いたものと考えられる。

ただ、青陵と随分齋との関係を小括したとき、いずれにしても疑問として残るのは青陵と随分齋の接点である。これについては現時点で両者の明確な接触の事実は確認できず、推定に拠らざるを得ない。ただ、も

し両者の交遊が第三者を介して始まったとするならば、青陵と関係する人々をつなぐキーワードの一つには「師弟関係」が挙げられる。例えば、青陵と京都の医家との交遊では、三谷公器との『文法披雲』をめぐる師弟関係、公器と蘭山との師弟関係、随分齋・煥と蘭山との師弟関係、随分齋・煥と元凱との師弟関係、元凱と河口信任との師弟関係など、そこには複数の縦の人脈と医学・解剖・本草学・弄石などを通じた横のつながりが交差して新しい関係が結ばれていったことが推定されるからである。この点では、書簡、日記などの個人的な交遊を示す史料を基に人と情報のつながりによる学問の学際的な展開を明らかにする研究の進捗を俟ちたい。

4-3 加賀藩物産方主付村井長世と青陵のつながり

加賀藩では、産物方を設置する以前からも度々領内の産物調査が行われており⁽⁴⁰⁾、薬種に限ったものでは比較的早い時期である貞享2年(1685)、藩医らが調査を行い『加能越所産薬種考』⁽⁴¹⁾を作成した例がある。同書には越中産の黄連に「上品他国へも出申由申候」、黄柏に「大型にて商売にも仕由申候」といった流通関連の情報がみられるが、黄連のブランドとしての価値については、前述のように青陵も指摘しているところである。

その後、享保から元文にかけて全国的な産物調査や幕府による採薬使派遣が行われたが、この時加賀藩では享保20年(1735)4月に御算用場に産物調方を設け高畠金左衛門、行山伝左衛門を産物方主付に任じて調査記録を集約している。それは、時期的には幕府に提出した加賀国産物帳の元資料になった産物書上を藩内各郡単位で作らせたり、本草家内山覚仲、稲新助らが中心に産物調査を行い、それをまとめた『享元塵余志』が作成されたりした頃である。

このように度々調査を行い情報が蓄積されても、それを活用する知見や時代に合う改革を進める藩内の空気が醸成していなかったためか、それらを活用した成果は上げていなかったようである。加賀藩での本格的な産物政策が始まるのは安永7年(1778)4月、村井長穹を加越能三州産物調方主付に任じ領内産物の現状調査や産物銀貸与などにより領内産業の育成を目指してから⁽⁴²⁾だが、その際にもまず着手したのは産物の実態調査であった。しかもこの時の政策では、それまで政策的に藩外への輸出を禁じていた産物でも益があるなら他に支障がなければ他藩へ販売を許可するという方針のあった点が注目される。

只今迄御留に相成候品に而も、御益に相成候儀有之候者、売出候儀御ゆるし可被成候。乍然御益のみを相考、外之障に成候儀を構不申様に有之候而は難成事に候間、其考も有之候様にと御意に付、奉畏候。
(『加賀藩資料』第九編 安永七年四月廿七日)

これを承けて、郡奉行から領内へ産物調査の触書が発せられた⁽⁴³⁾。

そして前述の方針もあってか黒部奥山で未開発林の木を他藩へ輸出することが計画され、それまで領内の材木保護のために七本の制を定めたことで不足した用材を他藩から輸入していたのに対し、領内で用材を自給するだけでなく一部は江戸にまで販売された⁽⁴⁴⁾。

しかし村井長穹は天明5年(1785)9月に罷免され産物方は廃止されている。これは天明3年に起きた飢饉があつこともその理由と言われるが、政策が円滑に進まずこの時は十分に成果を上げなかったことも窺われる。

政策上その後は時間が空くことになったが、安永7年の調査が不十分だったためか、再び文化8年(1811)になって郡奉行に命じ至急委細の調査報告を差し出させている。

御領国諸産物調査帖安永七年指出候通に、当時之分不残委細書出候様、御勝手方年寄中江申聞候条、早速被相調理、帳面に仕立、当月廿日迄に可被指出候 (『加賀藩史料』第十二編 文化八年十月二日)

ここにある「御勝手方年寄」が同年3月に就任した村井長世(以下、長世)であった。長世は金沢滞在中の青陵と関係が深くその思想に共鳴して改革に積極的であったから、青陵が文化2年に金沢を来訪し改作法以来農政を重視してきた旧態依然とした政策を批判し、重商主義に基づいた藩の増収を説いたことに影響を

受けた。それをふまえると、ここには安永7年の政策を仕切り直して最新の産物データを収集し、改革を押し進める意図があったものと考えられる⁽⁴⁵⁾。

そして、この時の調査に関連してもう一つ注目されるのは、享保元文の頃に産物調方がまとめた産物調査の写本が、文化8～10年頃になって新たにいくつも作られていた⁽⁴⁶⁾事実である。なぜその時期になって敢えて80年余も前の記録を活用しようとしたのか疑問が持たれるが、前述の文化8年に出された郡奉行への指示があったとことと併せて考えると、産物の現状を把握するとともに過去の情報との比較の重要性を感じた点に、長世が進めようとした産物政策の特徴があったのではないかと思われる。

例えば、元文2年の加賀領内調査の書き上げを元に本草家稲新助と内山覚仲が編纂した『加賀国産物志』は重要とされたようで写本が何種類も作られたが、その中には長世が前田土佐守直から借用したものを文化8年に自ら筆写し、同家の家中医でもあった本草家阪元慎⁽⁴⁷⁾が校正と付記した写本もある⁽⁴⁸⁾。

これらの具体的な活用を示す記録は管見しないが、青陵が『綱目駁談』や『陰陽談』で説いた加賀藩の産物政策への提言では具体的な魚介や材木などの他、塩や農作物などにも及ぶ。その具現には藩内の産物に対する現状とともに過去の実態の正確な情報が必要だったとすれば、産物情報の写本が作られていた時期と長世が産物政策をすすめた時期との重なりは相関する。

それに対して、『綱目駁談』で語られている立山山中の鉱物資源の提言は、かつて藩が行った硫黄試掘の情報⁽⁴⁹⁾などには全く触れられていないことから、これは過去の調査をふまえたものではなく、青陵が立山山中で見聞した記憶と、随分齋たち本草学者から得られた鉱物の知識を「理」によって解釈し、新しい視点から立山での地下資源開発論として長世に提言したものだと思われる。

文化10年9月には長世が産物方御用を命じられ、産物方役所を設置し産物政策が再開する。それまでの経緯からこの時の産物政策の改革の要点⁽⁵⁰⁾は、青陵の助言の影響を強く受けるものであったはずだが文化11年（1814）6月に産物方が廃止されて頓挫し、立山山中での産物開発が実現することはなかった。

頓挫には様々な理由があるだろうが、青陵との関わりから見れば、その提言自体が藩からの正式な諮問に拠るものではなかったこと、そして青陵の説く提言も、理論上はともかく、藩内で一致して賛同されていた訳ではなかったことが大きいだろう⁽⁵¹⁾。

4-4 長世と坂元慎、村松標左衛門の存在

これまで見てきたように、産物政策と産物調査は不可分である。享保元文の調査で中心となったのは稲新助や内山覚仲らの本草家であり、文化文政年間の産物政策で享保元文の調査内容の再度見直しに関与していたのは、長世とその配下の本草家坂元慎（以下、元慎）や村松標左衛門（以下、標左衛門）らであった。

標左衛門は、長世に仕え加賀藩産物方植物主付に任命され産物政策を現場で支えた本草家であったが、その抜擢には同じく長世に仕えていた元慎の推薦があった可能性もある⁽⁵²⁾。標左衛門と元慎はともに蘭山の門人だったので、そこには同門の縁も関係していたのかもしれない。そして、随分齋・煥もまた蘭山の門人であったから、金沢でも間接的に随分齋や青陵が関係した本草学、物産学の情報ネットワークが重層的に存在していた可能性も考えられる。

元慎は前述のように藩年寄村井家に家中医として仕えたが、医家としてよりもむしろ本草家としての活躍が注目される。前述の『加賀国産物志』の校正だけではなく、長世が作らせた植物図譜『屋漏堂花譜』（「屋漏堂」は長世の号）にも序文を載せる。同書は長世が早田淑慎に図を描かせ元慎に註釈を付けさせた博物書で、享和元年（1801）9月に完成したものである。長世は花譜の他に禽譜、虫譜までも作成させていることから、博物的本草学にも造形が深く、産物政策のための資料収集だけではなく博物的な本草趣味を持つ文人的な側面も持っていたと推察される。今後、金沢での学芸活動の担い手としての活動の点からも研究の必要があろう。

まとめにかえて

これまで、青陵の経世思想形成と本草学の展開とは異質なものに見えていた。しかしこの時代の経世論は経済理論の構築ではなく、治国安民を図る具体的な政治体制や社会経済のあり方を説くものであったことに鑑みれば、同時代の本草学がまた生薬学を基とし直接民生厚用に資する実学であった点で、むしろ両者は近い立ち位置にあったように思われた。

近世後期に隆盛した本草学の知識は、実学や学芸活動の様々な分野の基底にあって、その援用は想像以上に多岐に亘り、そこには師弟関係や同好の士との情報交換による深化、サロンの形成、モノと情報の交流を介した広がりが見られた。その展開を、自然界を広く観察し記載していく博物学系と民生厚用の実学に軸足をおく物産学系とでも言うべき型に括るならば、後者は産物調査を通して経済政策などにも関与したと言えるだろう。その実例は各地に散見されるが、小論は青陵の経世論と本草学に依拠する教養に関連する事例として、加賀藩での産物政策に対する助言にあった立山での資源開発を取り上げたものである。

青陵の学問的教養の根幹は儒学だが、現状に即した情報の収集は、各地で各層との交遊を通じた人とのつながりが基本であった。そしてそのような、人を介した横の情報ネットワークが果たした役割の大切さは近世本草学の展開でも同様であった。そこでは、人脈の中にも情報のキーマンが存在し、その関係者にどこかでコミットすれば本草学の範疇で情報ネットワークにつながることができ、そこから情報を得て自分の専門の中に援用できるシステムが形成されていたと考えられるからである。

青陵は交際範囲が広く、また本草家との関係だけが思想形成に影響したものではないが、医家や本草家を通して彼らの情報ネットワークと関係していたと見る視点は必要であろう。そして、交遊する人物が本草学に限らず様々な分野にネットワークを持つマルチな人物であることは青陵にとって大きなメリットだったに違いなく、本草学のつながりで言えば木村兼葭堂はまずその筆頭に挙げられるだろう。そこから兼葭堂の師である蘭山、弄石を通して随分齋と関係が深い木内石亭⁽⁵³⁾を通じて直接、或いは間接的に全国的な情報ネットワークともつながっていたと推定されるからである。

この時代の本草学ネットワークの特徴は、人的な広がりだけではなく、専門性が細分化されていないことで一個人が興味によってカバーした分野もまた広がったことがある。そうすると青陵が交遊を持った文人、医家、本草家たちが個々に持つ知的背景の幅の広さもまた、間接的に青陵の思想形成に影響したのではないかと思われる。青陵が実際に立山で見聞きしたことを元にその開発を提言するためには、その前段階として少なくとも石品に対する資源としての基礎的な産物情報の蓄積が必要であり、それは立山来訪の以前に医家、本草家との交遊の中から得ていたものと考えられるからである。

金沢滞在中の青陵の交友関係や加賀藩政を対象にした著作に関しては、現在まで多くの先行研究があり、中でも青陵と各地の医家との交遊の重要性は、合理的な思考様式や文人的教養の点で早くから指摘されてきた⁽⁵⁴⁾。そんな当時の医家とは、その多くが生薬の知識とともに博物的な知識を豊富に蓄えた本草家でもあり、同時に地方都市にあっては俳諧や漢詩などの文人趣味を通して地域の学芸活動を主導していた知識階級でもあった。そう考えると医家と本草家、文人と呼ばれた人々の持つ知識や教養には重なる部分が多く、医家との知の交流に注目することは、青陵の思想を多面的に分析する上で重要な指摘だと思われる。近世後期の本草学が自然界の理解を進める方向、各地で天産物を探索しその実態を把握する方向へ展開したことに鑑みれば、青陵が産物の開発や品質などを論ずる背景にも、医家や本草家との交流で得た実学的な天産物の理解や各地の産出情報が含まれていたのは当然であろう。

また、金沢を訪れる前から塾を構えた京都や大坂の医家や文人、そして金沢での藩政の改革に関心を持つ上級藩士や商人たちとの交遊による情報のつながりは、地理的なものだけではなく、友人やその師といった人的なつながりとも重層的に交差したものであった。特に小論でキーマンとして取り上げた随分齋、兼葭堂の両名は活動範囲が広く、青陵同様に当時においてはユニークな生き方をした人物でもあり、青陵は交遊を

通して彼らの人脈にコミットすることによって、直接出会っていたか否かは不詳としても、同時代の木内石亭、蘭山、山本亡羊など本草学の大家とも情報のつながりを持ち、その影響を受けていたのではないかと思われる。このような視点に立てば、青陵の思想が生み出されてきた教養、知的背景の幅はこれまで考えられていた以上に多岐にわたり広がったと考えてみる必要があるだろう。

【註】

- (1) 八木清治「海保青陵の交遊—青陵像再構成の試み—」（『福岡女学院大学紀要』1号、1991）、大島秀夫「海保青陵と京都における医学の展開」（『季刊日本思想史』十八号、1982）など。
- (2) 高瀬重雄『古代山岳信仰の史的的研究』（角川書店、昭和47）「第八章 海保青陵とその立山開発論」、廣瀬誠『立山のいぶき』（シー・エー・ピー、1992）「立山の産業開発」など。
- (3) 高瀬保「海保青陵書簡の考察—加賀藩政との関わりについて—」（『地方史研究』第二四〇号、1992）
- (4) 同論文、5～6頁参照
- (5) 青柳淳子「海保青陵の伝記的考察」（『三田学会雑誌』102巻2号、2009）、215～217頁参照。高瀬氏は賢弟とある点から禎文を弟子と見ていたが、青柳氏が「角田家系譜図」と磯ヶ谷紫江『墓碑史蹟研究』第39冊（後苑荘、1926）収載の「角田青溪墓と墓誌銘并序」を史料として、青陵の父角田青溪の墓誌銘から「禎文」が実弟角田彪の字であることを明らかにしている。
- (6) 高瀬保（1992）前掲論文。
- (7) 同論文、6頁参照。青陵が金沢を発ってから京都に到着直後の行動の詳細は、高瀬保氏による『書簡』の翻刻、解析によって明らかになったことである。
- (8) 青柳（2009）前掲論文、232頁参照。
- (9) 『書簡』には「此度モ竹中文卿セ話也、并ニ近江屋彦右衛門ト申豪富セ話也、又御序之時、両家へ書状被遣可被下候、慥ニセ話致候也」とある。
- (10) 徳盛誠『海保青陵 江戸の自由を生きた儒者』（朝日出版社、2013）331～339頁
- (11) 『綱目駁談』、『陰陽談』の解題は、徳盛前掲書「補説 青陵の著作について」を参照。
- (12) 藤橋でのことを「懸崖上路織如髮／誤杖空叢倒弄軀／五十二翁生未盡／一命繫得数茎蘆」と詠んでいる。『書簡』にはこれを含む藤橋（2首）、桑谷、室堂、五ノ越、雄山頂上のことを詠んだ計6首の七言絶句が載せられているが、この藤橋で転倒を詠んだもの以外の5首は「此五首ハ北国ニ而名高キ詩ユヘ入御覧候」と書き添えている。立山下山後に富山城下で旧知の富山藩儒市河寛齋と交遊した際の作かもしれない。
- (13) 「絶頂四臨無点雲／先鎮真箇出人群／拜来旭日三竿許／下界昏々猶夜分」の詩を作っている。
- (14) 『書簡』には、「飛州信州ヨリ盗ムヨシ也、大方本藩ノ木曾ノ民杯来ル事ナルベシ、山腰以下ニハ檜及栢杯多クアリ、唯禁シテ取ラズ、是も飛信ヨリ取ルヨシナリ」とある。
- (15) 山本章夫『入越日記』に、立山で観察した植物約50種の記録がある。正橋剛二『入越日記 能登・越中・立山に薬草を求めて』（桂書房、2017）に全文の翻刻がある。
- (16) 高瀬重雄「越中立山の硫黄採掘をめぐる考察」（『三井金属修史論叢』第10号、1978）196～200頁参照。加賀藩は地獄谷の硫黄には非常に早くから注目しており、藩の薬種調査記録『加越能所産薬種考』（貞享2年〈1685〉）には立山の硫黄について「下品之由申候然共／微妙院様（三代藩主利常）御代立山より御取寄被遊候を見申候に上品鷹ノ目と申す物にて、他国にも希なる由」とある。また、元禄11年（1698）には豊嶋藤兵衛を立山に派遣して増産を目的に硫黄の見分を行い、試掘した40貫目を藩に献上させた記録もある。
- (17) 青柳淳子「海保青陵における「理」の成立について」（『三田学会雑誌』101巻1号、2008）参照。
- (18) 『史記集解』（貨殖列伝第六十九）で地下資源埋蔵の道理を説く部分の註に『管子』（地数）から「上有丹沙者、其下有銻金」が引用されている部分を指す。
- (19) 八木清治「寛政期の海保青陵—その文人的活動—」（『年報日本思想史』17号、2018）、青柳（2009）前掲論文。
- (20) 八木（2018）前掲論文、76～78頁参照。
- (21) 水田紀久『蒹葭堂日記』（芸華書院、2009）では、寛政5年2月26日に「加州津田宇内」、寛政8年7月19日に「加々津田」とあり、いずれも随分齋・煥が蒹葭堂を訪ねていたものと見られる。
- (22) 雲母の一種。礫石とも言う。石薬として去痰、消化、鎮痛などに用いられた。

- (23) 日置謙『加能郷土辞彙』（金沢文化協会出版、昭和17）、大河良一『改訂 加能俳諧史』（清文堂出版、昭和49）参照。
- (24) 金沢市史編さん委員会『金沢市史 資料編15学芸』（2006）454～455頁参照。「津田随分齋（養）横山家御手医師 文化10（1813）年没墓地」とある。
- (25) 長山直治「加賀藩における海保青陵と本多利明—加賀藩関係者との交遊とその影響について—」（『石川県立金沢錦丘高等学校紀要』第15号、昭和62）には、青陵が随分齋のために寄せた「惟錯帖序」の中に「其遊益甚矣 其為益奇 其事益高」とあり、随分齋・養が煥に医業を譲ったあと、益々その奇矯な行動がひどくなってきたと紹介している。
- (26) 磯野直秀『日本博物誌年表』（平凡社、2006）401頁参照。当該記述の出典は木内政章の『本草綱目紀聞』の「題言」とある。この記述の元になったものは、現在武田科学振興財団杏雨書屋が所蔵する。
- (27) 松田清「山本章夫筆山本亡羊伝「先人言行録」について」（『近世京都』第4号、2021）79頁参照。随分齋・煥は蘭山の門で旧友の間柄で、天保五年に金沢で再会した時のことは、山本亡羊の『入越紀行』からの引用に「随分齋ヲ訪テ曩昔講学ノ旧ヲ話ス。相離レルコト四十年、猶一日ノゴトシ」とあることを紹介している。
- (28) 池田仁子『近世金沢の医療と医家』（岩田書院、2015）92、200～203、248～250頁参照。「表2 金沢城内において藩医以外に藩主前田家の診療に加わった御用医者 の事例」の中に、横山家の家中医として津田随分齋が、文化7年正月、文政7年7月、天保5年5月、天保12年2、3、6月に診療を行ったとある。随分齋・養は寛政12年に煥に家督を譲り隠居し文化10年に没しているの、これは煥を指すものと考えられる。同表からは、天保12年時点で藩医ではなかったことが分かるが、それ以降の処遇については分からない。松田前掲論文では、山本章夫『先人言行録』からの引用の中で随分齋・煥を「官医津田随分齋」と記しているが、これは亡羊の認識による表現なのか、詳細は分からない。
- (29) 日置前掲書、552～553頁参照。「俳諧をさらに学んで青野と号した。道順光明の二子で、別に家を分かちて本道の医を業としたが、酒食に耽り博奕を好み明和五年（1768）齡二十七を以て上国に走り、業を大坂に開いた。次いで母の病に困って郷に帰り、寛政十二年家を嗣子煥に譲り、また随分齋と称せしめ、己は豹阿弥と改め文化十年五月十八日七十二歳を以て歿した。」とある。
- (30) 平野満「小野蘭山の本草学と衆芳軒における門人指導」（小野蘭山没後二百年記念誌編集委員会編『小野蘭山』、八坂書房、2010）89頁参照。蘭山から能登に住む村松標左衛門宛の寛政11年（1799）年2月の書簡の中に「加州津田宇内は御近国之事御座候間、此方へ御尋被成可宜候。本人只今は随分齋と改申候。金沢下堤町に而御座候」とあることが載せられている。当時金沢に住んだ随分齋・煥の事を京都の蘭山が知っていたことを見れば、寛永12年の養の隠居以前から随分齋と改名していたことを窺わせる。
- (31) 板垣英治『金沢大学の淵源』（金沢大学資料館紀要 創基150年記念別冊、平成24）18頁参照。安政2年（1855）10月に津田淳三ら9名（他は、今村兎朔、田中大玄、島崎元鼎、津田随分齋、伏田元幹、田中兵庫、土岐雄吉、遠藤三六）により金沢の堤町に家を借りて私立種痘所を開いたのがその濫觴である。この中心になった津田淳三は随分齋・煥の養子である。
- (32) 木内石亭『天狗爪石奇談』（寛政8年〈1796〉刊）には「加賀金沢津田氏【俗称太一郎／号随分齋】弄石同癖ノ旧識ナリ 天明七年十二月五日爪石一箇ヲ贈テ（略）」とある。【 】内は割註
- (33) この時の目録『奇石会品目』には石亭を含む弄石社の社友19名の計135種の収集品が載せられており、随分齋・養は5種「能登産 含水瑪瑙」、「出羽産 自然銅」、「越中産 柏枝瑪瑙」、「雷環」、「雷鑽」を出品していた記載がある。
- (34) 原本は失われ、九州大学理系図書館と国立国会図書館に写本（上中下3巻3）が残る。九州大学所蔵本上巻扉には、筆写された際に書き加えられたものと見られる「津田養徳夫撰、男煥君若撰、石丈野史上 諸国産の石について記載」の文字がある。全国各地に産する岩石、化石、鉱石、奇石など1317種を旧国ごとに記載する。その内加越能三国は加賀87、越中44、能登40の計171種で約13%、遊学した京都、及び隣接する畿内（大和、山城、摂津、河内、和泉）295種で約23%と高い比率になる。養、煥ともにこの地域の石類に詳しくあったことがわかる。日本鉱業史料集刊行委員会編『日本鉱業史料集』第十三期近世編下（白亜書房、1990）には九州大学本を底本にした影印があり、小論ではこれを参照した。
- (35) このうち「石炭」、「硫黄」、「やまうみの握り飯」（団塊状の玉滴石を指す。また〈やまうみ〉は〈やまうば〔山姥〕の誤記か）、「材木の化石」（柱状節理を指す）は、『雲根志』にも記載がある。「自然瑪瑙硯」の産地「立山唱名か滝の流れ有 願寺川」は常願寺川上流、称名川の付近を指すものであろう。この他に『雲根志』でも挙げられているものには「山姥鑿」、「鼓石」、「青焰硝」などがある。
- (36) 大沢眞澄「小野蘭山と鉱物—『本草綱目』を中心に—」（小野蘭山没後二百年記念誌編集委員会前掲書、（15）頁参照。江戸時代の鉱物に関する知識を、木内石亭の『雲根志』に代表される弄石派と小野蘭山をはじめとする本草学派の石

薬としての鉱物、鉱山に関するもの2つに大別する考え方を示している。

- (37) 『植物研究雑誌』6巻5号(1929)には坂元慎が嘉永5年(1852)5月28日に江戸白髭舎で開催した薬品会の趣意書と目録が写真掲載されている。その時には津田随分齋・煥が出品しており、「石鬚、人代石(神代石カ)ナタ形 同上品トボコノ右三種 津田随分齋」とある。それに続く牧野富太郎の署名記事には「右会ノ出品者中ノ津田随分齋ハ小野蘭山ノ高弟デアッタトノ事デアアル」とある。津田随分齋・煥が小野蘭山に入門していたこと、出品が全て石品であることから、随分齋・煥も弄石に造詣が深かったことがわかる。但し、出品物自体は養の収集を引き継いだ品だった可能性もある。
- (38) 津田進三「特別講演・江戸時代における石川県医学史」(『日本医学学会雑誌』第二十二巻第二号、昭和51年)98頁参照。「荻野元凱は早くから蘭学に接し明和7年(1770)「刺絡篇」を著し、さらに河口信任らの解屍にも立ち会った。一方寛政10年の小石元俊らの施薬院の解屍には加賀小松の梁田元長が列なっており、津田随分齋もまた解剖に習熟していたにもかかわらず、さらに後年の蘭学興隆期も含めて石川県内では明治まで何故か一回の解剖も行われなかったようである。」とある。随分齋が養、煥のいずれかを指すか、またいつの解剖に立ち会ったのかも曖昧である。
- (39) 煥が元凱に入門するのは寛政4年なので、この時にはまだ上洛していなかった可能性が高い。当時、解剖の所見では山脇東洋が体内臓器解明を重視したのに対して、『解屍編』では頭部の解明を行い脳と眼球の仔細な解剖図を載せている。青陵の記述に拠れば随分齋は頭と指を自宅へ持ち帰り詳細に解剖したことになるが、如何に奇行があったとは言え、これが意味なく猟奇的な趣味による行為とは考えにくく、頭部の詳細な解剖を行ったことが『解屍編』の解剖図や記述に関連しているものとすれば、養の行動に合理的な説明が付くと考える。
- (40) 富山県立山博物館平成20年度特別企画展展示解説書『薬草と加賀藩 立山から百味筆筒への道を探る』所収の、嘉藤潤一「Ⅱ. 加賀藩領内の薬草・産物調査と立山」に調査の歴史と作成された書籍の概要がまとめられている。
- (41) 加越能文庫(金沢市立玉川図書館蔵)。請求番号[16.76-14]。外題には「加能所産薬種考 単」とある。内題に「貞享乙丑年暮者下旬調をく 養叔 玄悦 恭順」とあり、貞享2年(1685)に加賀藩医の堀部養叔、山脇玄悦、坂井恭順が加賀、能登、越中で薬種を調査し書き上げたもの。現存する史料の中では最も古い薬種調査の書き上げである。
- (42) 『金沢市史 通史 近世2』78頁参照。
- (43) 伊東文書『御用留』(富山県立図書館蔵)に、新川郡奉行が発した「安政七年六月 領国産物調理差出方申触書」が残る。同文書は新川郡沼保村の十村役伊東家の文書。文化3年7月に立山から下山後に青陵は伊東彦四郎を訪ねている。
- (44) 平成21年度富山県公文書館特別企画展解説書『近世越中産物の世界』4頁参照。
- (45) 長山直治『寺島蔵人と加賀藩政』(桂書房、2003)110~114頁参照。
- (46) 加越能文庫『郡方産物帳 六 新川郡』(金沢市立玉川図書館蔵)が元文3年に作成された産物帳の写本で文化9年に作成されたものであることは、題簽に小さく朱書きした「文化九年壬申十月廿七日出来」の記載からわかる。同文庫の目録に拠れば、題簽の記載では『越州物産帳』、『能州物産帳』にはいずれも文化10年の日付があり、享保元文の産物調査の写しと見られる。
- (47) 坂元慎、字は元脩、通称元慎(宝暦2年<1752>~文政4年<1821>)は坂元慎と書かれたものもある。また子の尚教も本草家で元慎を名乗ったので、諸史料に見える「坂元慎」の活動は、何れであるか確認に注意が必要である。
- (48) 財団法人研医会図書館がwebサイトで公開する「研医会通信10号」(2007.4.6)には、同館が所蔵する『加賀国産物産書上帳』上・下巻の跋に「右 文化八辛未年 十月 前田土佐守直方賢候ヨリ借用写之者也 村井長世」と記載のあることが紹介されている。岩瀬文庫古典籍書誌データベースでは、同文庫所蔵『加賀国産物』との模写関係が指摘されており、岩瀬文庫所蔵本の巻末には「右 文化八辛未年 十月 前田土佐守直方賢候ヨリ借用写之者也 村井長世ノ右文化癸酉年閏十一月高島木工方所持之本を以如加朱」とある。
- (49) 加越能文庫『立山硫黄之事并河原波山師小屋之事』(金沢市立玉川図書館蔵)参照。「立山硫黄之事」は元禄12年(1699)に豊嶋藤兵衛が立山で硫黄を試掘した際の費用の覚書、奥村湍兵衛の添書、元禄13年(1700)2月の御用番宛ての立山硫黄採掘伺の史料。
- (50) 高瀬保「加賀国産物の江戸への進出」(『富山史壇』22号、1961)32頁参照。
- (51) 長山(2003)前掲書、58~62頁参照。
- (52) 『金沢市史 通史近世2』781~783頁参照。
- (53) 『兼葭堂日記』には、寛政3年9月21日、22日に石亭が兼葭堂を訪ね一泊していたこと。また寛政11年9月2日、寛政12年11月11日には石亭からの書状が来たことを記しており、兼葭堂と石亭も個別に接点を持っていたことが分かる。
- (54) 八木(1991)前掲論文、79~82頁参照。